

日本英文学会九州支部 第 66 回大会

期日 2013 年（平成 25 年）
10 月 26 日（土）・27 日（日）

場所 鹿児島国際大学

日本英文学会九州支部

〒 862-8502 熊本市東区月出 3 丁目 1 番 100 号
熊本県立大学文学部英語英米文学科
村里好俊研究室内

TEL (096)321-6616 FAX (096)383-3496

E-mail: murasato@pu-kumamoto.ac.jp

HP: <http://kyushu-elsj.sakura.ne.jp>

2013-14 年度 日本英文学会 九州支部 理事一覧

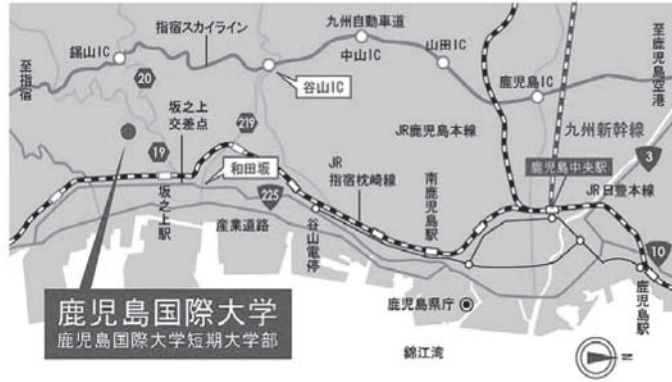
鵜飼 信光 (九州大学)
大島由起子 (福岡大学)
太田 一昭 (九州大学)
大橋 浩 (産業医科大学)
木下 善貞 (北九州市立大学)
小谷 耕二 (九州大学)
竹内 勝徳 (鹿児島大学)
登田 龍彦 (熊本大学)
西岡 宣明 (九州大学)
馬場 弘利 (福岡女子大学名誉教授)
早瀬 博範 (佐賀大学)
向井 毅 (福岡女子大学)
村里 好俊 (熊本県立大学)
山内 正一 (福岡大学)
山田 英二 (福岡大学)

2013-14 年度 日本英文学会 九州支部 事務局員一覧

支部長・日本英文学会理事	村里好俊
日本英文学会評議員	鵜飼信光
『九州英文学研究』編集委員長	大橋 浩
副支部長	三木悦三
事務局長	難波美和子
事務局長補佐	水尾文子
事務局長補佐	村尾治彦
事務局長補佐	坂井 隆

鹿児島国際大学アクセスマップ

〒 891-0197 鹿児島市坂之上 8 丁目 34-1 TEL 099-261-3211 (代表)



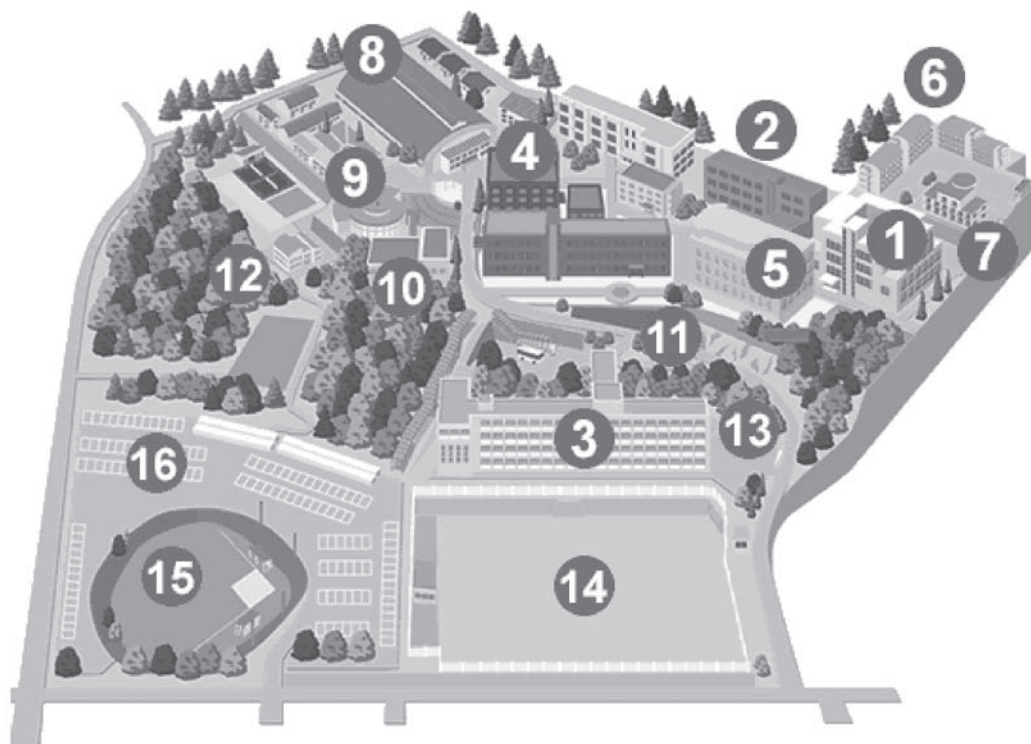
JR 指宿枕崎線

- ・鹿児島中央駅から普通列車で約 20 分、「坂之上」駅下車 / スクールバスで約 5 分。
スクールバス（「坂之上」駅と大学の間を無料で運行しています）
- ・「坂之上」駅を出て、左（南）に徒歩で約 200 メートルお進みください。スクールバスの乗り場があります。
- ・土曜日は、「坂之上」駅の列車到着時刻にあわせて、スクールバスが運行しています。
- ・日曜日は、学会の開始時刻と終了時刻にあわせて、臨時運行します。

宿泊施設情報については、下記の英文学会九州支部のホームページをご覧ください。

<http://kyushu-elsj.sakura.ne.jp/>

鹿児島国際大学キャンパス



- | | | |
|--------------|------------------|-----------|
| ① 7号館 (学会会場) | ⑦ 国際交流会館 | ⑬ 桜坂 |
| ② 5号館 | ⑧ 体育館 (フィールドハウス) | ⑭ 総合グラウンド |
| ③ 8号館 | ⑨ 学食 Vina Vina | ⑮ 野球場 |
| ④ 4号館 | ⑩ ユーカリ会館 | ⑯ 学生駐車場 |
| ⑤ 図書館 | ⑪ 森のカフェハーモニー | |
| ⑥ 女子学生寮 | ⑫ 合宿研修所 | |

懇親会場

錦江高原ホテル (〒 891-0144 鹿児島市下福元町 3273 / TEL 099-262-2111)

懇親会場へのアクセス

学会会場 (鹿児島国際大学) からホテルの送迎バス (無料) でご案内します。

学内食堂のご案内 (土曜日のみ利用可)

* 午後1時まで: ○ 森のガヤカフェ (7号館前)

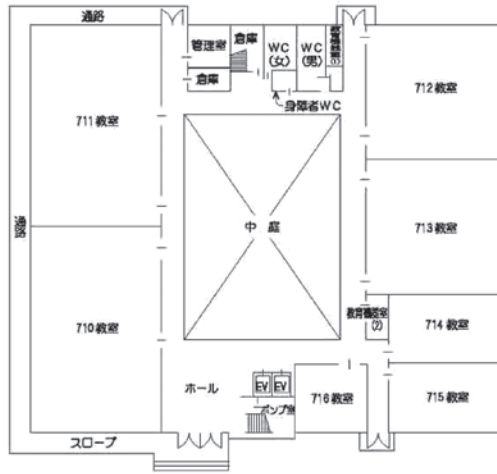
* 午後2時まで: ○ 大学食堂「Vina Vina」 ○ レストラン「クーガ」(ユーカリ会館2階)

○ 図書館ガヤカフェ (大学図書館4階)

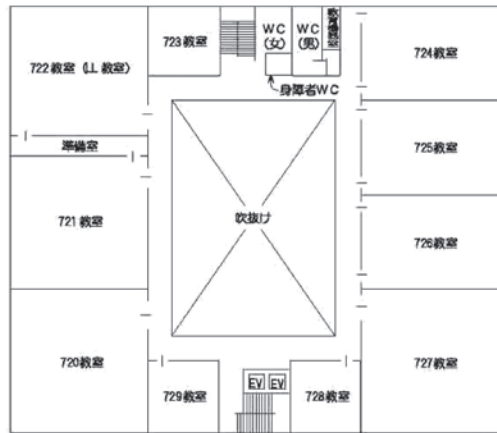
* 午後3時まで: ○ 森のカフェハーモニー (8号館西側ウッドデッキ)

7号館

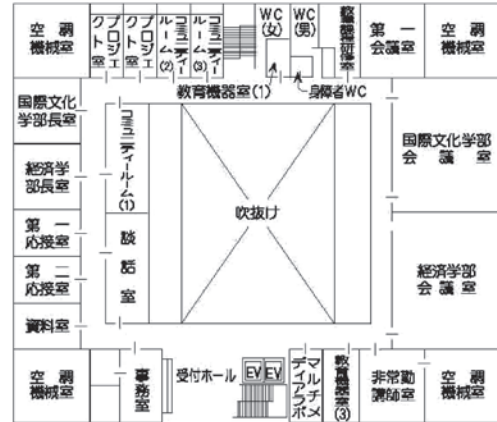
1階



2階



3階



会場案内

鹿児島国際大学 7号館

(〒 891-0197 鹿児島市坂之上 8 丁目 34-1)

10月26日 (土)

開会式 (13時) 710 教室

研究発表 (① 13時30分 ② 14時10分)

第1室 (イギリス文学) 712 教室

第2室 (イギリス文学) 713 教室

第3室 (アメリカ文学) 724 教室

第4室 (英語学) 725 教室

シンポジウム (15時～17時30分)

第1部門 (イギリス文学) 710 教室

第2部門 (アメリカ文学) 720 教室

第3部門 (英語学) 726 教室

懇親会 (18時30分～20時30分) (会費 5,000円 学生 3,000円)

10月27日 (日)

研究発表 (① 10時 ② 10時40分 ③ 11時20分 ④ 12時 ⑤ 12時40分)

第1室 (イギリス文学) 712 教室

第2室 (イギリス文学) 713 教室

第3室 (アメリカ文学) 724 教室

第4室 (英語学) 725 教室

第5室 (英語学) 726 教室

特別講演 (14時00分) 710 教室

閉会式 (15時30分) 710 教室

受付 1階ホール

研究発表者・司会者・シンポジウム講師控室 728・729 教室

一般会員控室 711 教室

書籍展示会場 3F 経済学部会議室

大会本部 716 教室

日本英文学会九州支部第 66 回大会プログラム

時：2013 年 10 月 26 日（土）・27 日（日）

所：鹿児島国際大学

第 1 日 10 月 26 日（土）

（受付は正午より 7 号館 1 階ホールにて行います。受付では年会費の納入はできません。）

開会式 13 時より（710 教室）	司会・九州大学教授	鵜飼 信 光
開会の辞	支部長・熊本県立大学教授	村 里 好 俊
開催校挨拶	鹿児島国際大学副学長	飯 田 敏 博
事務局報告	事務局長・熊本県立大学准教授	難 波 美 和 子
優秀論文賞等選考報告	編集委員長・産業医科大学准教授	大 橋 浩

研究発表（① 13 時 30 分 ② 14 時 10 分）

第 1 室（712 教室）	司会 活水女子大学教授	井 石 哲 也
1. <i>The Castle of Otranto</i> における Matilda の死についての考察	熊本県立大学大学院博士前期課程	板 橋 奈 央
2. 『ロビンソン・クルーソー』における語り手の書記に対する意識 ——作品構成や流動性に関する考察	九州大学大学院修士課程	才 津 絢 子
第 2 室（713 教室）	司会 山口大学教授	池 園 宏
1. Christopher Banks の孤独な旅——上海からロンドン、そしてふたたび上海へ——	九州大学大学院博士後期課程	阿 部 卓 郎
2. <i>A Christmas Carol</i> のメディア性——慈善と経済から	北九州市立大学大学院博士前期課程	原 田 昂
第 3 室（724 教室）	司会 福岡大学教授	大 島 由 紀 子
1. 愛の変奏—— <i>A Mercy</i> における靴のモチーフ	九州大学大学院修士課程	河 野 世 莉 奈
2. 身体的生命体としての列車、スローターハウスという身体器官 —— <i>Slaughterhouse-Five</i> において閉鎖的空間と身体が結びつく地点	司会 西九州大学准教授 九州大学大学院博士後期課程	渡 邊 真 理 子 吉 津 京 平
第 4 室（725 教室）	司会 福岡大学教授	久 保 善 宏
1. 英語副詞節の統語分析と付加詞の島	九州大学大学院博士後期課程	吉 村 理 一
2. 英語の空所化構文及びストリップングの認可条件について	九州大学大学院博士後期課程	高 木 留 美

シンポジウム (15時～17時30分)

第1部門「イギリス文学」(710教室)

めぐり逢う幽霊たち——近代英文学と口承の伝統

司会・講師	佐賀大学教授	木原誠
講師	上智大学准教授	小川公代
講師	和歌山大学准教授	桐山恵子
講師	北九州市立大学教授	木原謙一

第2部門「アメリカ文学」(720教室)

アメリカ文学とお金

司会・講師	九州大学准教授	下條恵子
講師	甲南大学教授	秋元孝文
講師	熊本県立大学准教授	坂井隆
講師	黒田藩プレス代表	Edward Lipsett

第3部門「英語学」(726教室)

談話と統語構造とのインターフェイスを求めて——例外的文法現象とフェイズ理論——

司会・講師	九州大学教授	西岡宣明
講師	宮城学院女子大学准教授	増富和浩
講師	産業医科大学助教	田中公介
講師	九州大学専門研究員	團迫雅彦

懇親会 (18時30分～20時30分)

場所 錦江高原ホテル

(会費 5,000円 学生 3,000円)

(〒891-0144 鹿児島市下福元町 3273 / TEL 099-262-2111)

【懇親会場へのアクセス→学会会場(鹿児島国際大学)からホテルの送迎バス(無料)でご案内します。】

第2日 10月27日(日)

(受付は9時20分より7号館1階ホールにて行います。受付では年会費の納入はできません。)

研究発表 (①10時 ②10時40分 ③11時20分 ④12時 ⑤12時40分)

第1室 (712教室)

	司会	北九州市立大学教授	木下善貞
1. <i>Lilith</i> における「生命の輪」の起点の苦悩			
		九州大学大学院修士課程	隈部歩
2. <i>The Hobbit</i> 帰還の物語——ドワーフの帰還による伝説世界の回復			
		九州大学大学院修士課程	渡邊裕子
	司会	福岡大学教授	山内正一
3. マリアン・アールと流れる創造性			

——バレット・ブラウニング『オーロラ・リー』における詩作と時代性

九州大学大学院博士後期課程 浜本裕美

司会 九州大学教授 太田一昭

4. 「愛」の変奏——ジョン・リリー：『ガラシア』から『愛の変身』へ——

鳴門教育大学准教授 杉浦裕子

5. ブルジョワ家庭悲劇の誕生

——英国歴史劇と She-tragedy の系譜からみた *The Tragedy of Jane Shore*

(招待発表) 鹿児島大学教授 大和高行

第2室 (713教室)

司会 九州大学教授 鷗飼信光

1. *Brideshead Revisited* と *The End of the Affair* との比較研究

—— Sebastian, Julia, Sarah の “holiness” をめぐって

福岡大学大学院博士後期課程 福田成美

2. クルツにみる異化のメカニズムとしての「怪物」

—— *Heart of Darkness* におけるカーニヴァルの力学とニーチェ的思想

北九州市立大学大学院博士後期課程 今川京子

司会 宮崎大学准教授 新名桂子

3. 母性による支配の城—— *To the Lighthouse* における母親の支配と誘引

九州大学大学院博士後期課程 浅田えり佳

4. *To the Lighthouse* における他者理解の可能性

九州大学大学院博士後期課程 原田洋海

司会 福岡女学院大学大学院教授 吉田徹夫

5. 『夜中に犬に起こった奇妙な事件』の反探偵小説性とポストモダニズムからの踏み出し方

(招待発表) 山口大学教授 宮原一成

第3室 (724教室)

1. 【発表なし】

司会 九州大学教授 高橋勤

2. *My Mortal Enemy* における対立要素

九州産業大学准教授 志水智子

司会 鹿児島女子短期大学教授 高島まり子

3. *The Blithedale Romance* —— Zenobia への愛の告白

熊本学園大学大学院博士後期課程 中嶋寿子

司会 西南学院大学名誉教授 安河内英光

4. 密室に注がれた視線——19世紀アメリカ文学の都市とポーの推理小説

(招待発表) 九州大学准教授 高野泰志

5. 【発表なし】		
第4室 (725 教室)	司会 福岡工業大学教授	古川 武史
1. 経験者使役構文について	九州大学大学院博士後期課程	萱嶋 崇
2. 節構造と文法性——動名詞から見えるもの	司会 九州大学准教授	鈴木 右文
	九州大学大学院博士後期課程	下飯屋 翔
3. Transfer とスコープ解釈に関する考察——弱フェイズの観点から	九州大学大学院博士後期課程	大塚 知昇
4. 【発表なし】		
5. 【発表なし】		
第5室 (726 教室)		
1. 【発表なし】		
2. 【発表なし】		
3. 英語の主題右方転移構文における任意性について	司会 熊本大学教授	登田 龍彦
	福岡大学大学院博士後期課程	濱 保義宏
4. 動詞句削除の v P 領域における VP 話題化移動分析	九州工業大学講師	前田 雅子
	福井大学講師	中村 太一
5. サバイブ・ミニマリズムにおける島の効果について	司会 長崎大学教授	廣江 顕
	(招待発表) 宮崎公立大学教授	福田 稔
特別講演 14時00分より (710 教室)	司会 九州大学教授	小谷 耕二
東京大学大学院教授 柴田 元幸		
「アメリカ新聞漫画の黄金時代 1905-1944」		
閉会式 15時30分より (710 教室)		
挨拶	鹿児島国際大学教授	小林 潤司

〈第1日〉10月26日(土)

研究発表

第1室(712教室)

司会 活水女子大学教授 井石哲也

1. *The Castle of Otranto* における Matilda の死についての考察

熊本県立大学大学院博士前期課程 板橋奈央

Horace Walpole 作、*The Castle of Otranto* (1764) はゴシック小説の起源とされ、物語では超自然現象、つまり巨大な兜、銅像、甲冑や肖像画がまるで意思を持っているかのようにひとりでに動き出すという、現実世界では説明のつかない現象が起こる。本作品を論じる際、従来では城主 Manfred を主軸として、彼を取り巻く人物の役割が指摘されることが多く、また超自然現象が物語を「正しい終焉」に導くための道具として捉えられている。

本発表では、Manfred の娘である Matilda と彼の息子の婚約者である Isabella の関係に焦点を当てる。この2人の関係は、若き農夫であり、さらに城の正当な所有者でもある Theodore を通して、また Manfred とその妻 Hippolita を通して、お互いに鏡に映した光と影の存在であると捉えることができる。ここから、なぜ Matilda が殺されなければならなかったのかについて明らかにしたい。その際、超自然現象の役割を、激情に突き動かされる Manfred を理性的に戻す役割として捉え、感情と理性の狭間で揺れる登場人物たちの葛藤を読み取る。

2. 『ロビンソン・クルーソー』における語り手の書記に対する意識

——作品構成や流動性に関する考察

九州大学大学院修士課程 才津絢子

当時の霊的自伝や航海記を模して、自伝的回顧録の形式を採るダニエル・デフォーの虚構作品、『ロビンソン・クルーソー』(1719)。作品には大別して行為主体である過去の主人公に、回顧録を記す現在の主人公という二層の意識構造が存在する。しかし作品において過去の主人公の意識というものとは存在しないとみなせる程、それは現在の主人公のものに統制、操作されている。その傾向は、過去の主人公の心情や思考が、語り手(現在の主人公)の書記の過程・意向に応じて変化しているというテキスト上の側面に顕著である。これはそもそも作品が、内的固定焦点化による語りを採用し、語り手による物語内容の取捨選択、すなわち隠蔽と開示を内包するがゆえの特徴であるが、本発表では更に、こうした現在の意識の介入から、語り手の書記に対する態度を明らかにすることを目標とする。作品の構成や、作中に伺える矛盾・流動・隠蔽・偽装を基に考察を行う。

第 2 室 (713 教室)

司会 山口大学教授 池 園 宏

1. Christopher Banks の孤独な旅

——上海からロンドン、そして再び上海へ——

九州大学大学院博士後期課程 阿 部 卓 郎

Kazuo Ishiguro の *When We Were Orphans* (2000) の主人公 Banks は、幼くして孤児となってイギリスへ連れ戻され、*A Pale View of Hills* の Keiko と同様の（あるいは）それ以上に厳しい状況に置かれている。しかし、Banks は、自死する Keiko とは異なり、精神的に追い詰められることなく、幼いころからの夢を実現し、探偵となる。この両者の描写の違いは、何に由来するのか、そのように Banks を描いた作者の意図は何であったのか——これを Banks の言動を詳細に分析することによって探してみたい。特に注目したいのは、Banks と母親との関係である。Banks は、母親と再会する。しかし再会したものの、結局母親を施設に残して英国に去る。この時の Banks の行動心理をイシグロの実人生との関連において分析し、この作品が作者にとってどのような意味もっていたかを明らかにしたい。

2. *A Christmas Carol* のメディア性——慈善と経済から

北九州市立大学大学院博士前期課程 原 田 昂

Charles Dickens は *A Christmas Carol* によってクリスマスを再定義した、という主張には疑いの余地はない。しかし本作品が、クリスマスを純粋な宗教行事としてではなく、現在まで続くクリスマスと商業の関係を生み出した点はあまり語られていない。本作品は Jacob Marley の死から 7 年目と設定される。7 という数字は、キリスト教において度々意味をもつが、ここでは特にヤコブの労働年数と安息年に注目することで、本作品におけるクリスマスを新たな安息日として解釈する。この安息日は慈善的精神をもつものであるが、その慈善こそ経済を成立させる要因である。このことは、宗教行為であった伊勢参りが観光となった現象の中にも見られるものであり、*A Christmas Carol* はこの転換現象を描くものであるといえる。本発表は *A Christmas Carol* を慈善と経済の関係から読み解くことで、本作品がクリスマスを、市場という情報に加速を加えるメディアとして成立させたことを明らかにするものである。

第 3 室 (724 教室)

司会 福岡大学教授 大 島 由紀子

1. 愛の変奏——*A Mercy* における靴のモチーフ

九州大学大学院修士課程 河 野 世莉奈

Toni Morrison の作品、特に *A Mercy* (2008) における靴のモチーフについて考察する。Morrison 作品において、靴のモチーフは効果的に使われており、重要な要素である。なぜなら、Morrison は登場人物の外見上の特徴を描く際にこのモチーフを多用するからであり、またこのモチーフは Morrison 作品とは切っても切れない奴隷制度とも深い関係を持っているからである。とりわけ、

17世紀後半アメリカが舞台である第9作 *A Mercy* では、奴隷である主人公 Florens と靴は深く結びついている。Florens の語りで始まる冒頭には、“The beginning begins with the shoes” という一文があり、靴を欲しがらる Florens と周りの人々の反応は対照的である。本発表では、このモチーフが Morrison 作品においてどのような役割を担っているかを明らかにした上で、この靴のモチーフに向かう Morrison 自身の意識がどのように作品に投影されているのかを検証したい。さらに、Morrison の他の作品とも比較しながら、Morrison 作品における靴の持つ意義を探りたい。

司会 西九州大学准教授 渡 邊 真理子

2. 身体的生命体としての列車、スローターハウスという身体器官

——*Slaughterhouse-Five* において閉鎖的空間と身体が結びつく地点

九州大学大学院博士後期課程 吉 津 京 平

Kurt Vonnegut の小説においては、乗り物と身体、建物と身体といった、ふつう結びつきそうにないものが結びつくようだ。*Car's Cradle* では、アイス・ナインの脅威から逃れるための防空壕の入り口を、“[t] he oesophagus of the dungeon” というように、「地下牢の食道」と表現している。*Slaughterhouse-Five* では、列車の貨車を、「通気口を通じて食べ、飲み、排泄する単一の生命体」というように、身体器官に喩えている。このことに注目すれば、列車から降ろされた戦争捕虜が最終的に収監されることになるスローターハウス5という閉鎖的空間さえも、身体器官のイメージが付与されていることに気づく。本発表では、*Slaughterhouse-Five* において、ほとんど取り上げられてこなかった身体的イメージに着目し、そこから Vonnegut の身体観を明らかにしたい。

第 4 室 (725 教室)

司会 福岡大学教授 久 保 善 宏

1. 英語副詞節の統語分析と付加詞の島

九州大学大学院博士後期課程 吉 村 理 一

生成文法においては、Ross (1967) の研究以来、副詞節からの抜取り現象が研究されており、一般的に、副詞節内から項や付加詞の抜取りが禁止される (*To whom_i did you leave without speaking *ti*?, *How_i was he fired after behaving *ti*?). 付加詞の島についての分析として代表的なのが、Huang (1982) の CED や Chomsky (1986) の下接の条件であるが、両者ともに 1980 年代の生成文法のモデルを基礎にしている為現行の極小主義とは相容れない。本発表では、文末に生起する副詞節に焦点をあて、Stepanov (2007) の分析を土台に、付加詞と見なされる副詞節の構造と付加するタイミングについて論じながら、付加詞の島制約を極小主義の立場から説明することを試みる。

2. 英語の空所化構文及びストリッピングの認可条件について

九州大学大学院博士後期課程 高木留美

省略構文の認可条件の代表的な提案として、Lobeck (1995) が挙げられる。

- (1) a. John talked to Bill but Mary didn't [e]. (動詞句削除)
 b. We want to invite someone, but we don't know who [e]. (間接疑問縮約)
 c. Although John's friends were late to the rally, Mary's [e] arrived on time. (NP内削除)

Lobeck (1995) は、(1) のそれぞれの省略位置が様々な範疇の pro であり、これらは (2) の条件によって認可されると提案している。

(2) Pro must be the complement of a functional head that agrees with its specifier.

しかし、Lobeck (1995) は従属節における生起可能性等に基づき、空所化と Stripping はこれらとは異なるタイプであると主張している。

これに対し、本発表では空所化は主要部 Foc が削除認可に関係する機能的な主要部であり、その指定部に残存要素を有し、TP を補部としてとるため削除が認可されるという認可条件を提案する。さらに、省略位置は pro ではなく、完全なる統語構造を有しており、PF 削除が行われるということを主張する。また、stripping の派生についても考察し、特定の認可条件によって削除が認可されることを提案する。

シンポジウム

第1部門「イギリス文学」(710教室)

めぐり逢う幽霊たち——近代英文学と口承の伝統

司会・講師 佐賀大学教授 木原 誠

講師 上智大学准教授 小川 公代

講師 和歌山大学准教授 桐山 恵子

講師 北九州市立大学教授 木原 謙一

モダニズム文学、その奥底には蠢く「幽霊」たちの気配で満ちている。近代的思考としての科学が排除する最たるものが幽霊であることを思えば、これはパラドックスである。だが幽霊譚を生む土壌としての「都市」は、この矛盾を解く手掛りを与えてくれる。幽霊は人里離れた原野ではなく、実は、人・物・情報が交差するアジール（「無縁・周縁」）としての都市を好むからである。むろん、幽霊は都市に限って出没するわけではないし、「モノ」の気配を世々に伝える「物語」には各土地固有のものがある。ただし、いかなる伝承であろうと、その伝播者（芸能者）と伝達のネットワークの存在なしに、数多の人の知る「伝説」とはなりえない。かくして、旅芸人たちを引き寄せ、情報のネットワークのコアとなる都市は、地方の幽霊（土地の記憶＝ゲニウス・ロキ）たちの「出会いの場」、無縁墓地となっていく（幽霊の世界においても都市化は進行している）。幽霊の出没件数が近代文学において急増する所以がここにある。このことを突き詰めて考えていくと、作家の個性に偏重される近代文学の読みの盲点を突く一つの問いにまで至る——近代文学の背後には様々な記憶（幽霊）の声＝口承の伝統があり、近代の作家たちはそれらを取捨選択しながら自らの才により一つの作品に編み上げているのではないか（再話の編集＝インターテキストチュアルとしての作品）。本シンポジウムでは、近代英文学にみられる幽霊・怪物の系譜を、人・モノ・伝承がめぐり逢う公共の場、都市の形態に着目しながら辿ってみたい。

煉獄と中世都市伝説——幽霊は存在するのかもしれないのか、それが問題である

木原 誠

〈津の都市ロンドン〉、そのもっともアジールな場、公衆劇場から一つの名セリフが生まれた——「存在するのかもしれないのか、それが問題である。」このセリフが存在の深い問いとなる理由の一つは、存在するものの正体が予め隠蔽されているからであろう。だが、〈中世の都市伝説〉を知る当時の観客にとってみれば、存在Xの正体およびそれが何を意味していたかは明白（公然の秘密）であったに違いない。すなわち、存在Xとは幽霊であり、その存在を信じることは、当時弾圧の対象にあった〈隠れカトリック〉であることを意味していたであろう。というのも、幽霊が存在する前提には煉獄の存在が不可欠であるが、煉獄はカトリックが公認する一方、プロテスタントはこれを強く否定するからである。シェイクスピアは、ハムレットを新教の牙城＝ウィッチェンベルグ大学の学生に設定する一方（ルターはこの神学教授）、煉獄の表象＝アイルランド・ドニゴール・ダーク湖の「守護聖人パトリックに誓い」を立てさせることで、両義性という名の細い綱を編んで、煉獄の踏み絵の上を渡る大道芸人となってみせる（時折りしも、英国はアイルランドに出兵）。本発表では、このような緊迫したドラマ設定を可能にした二つの都市（津の都市ロンドンと修道院都市ドニゴール）の分母に、両義性を内包する「周縁・アジール」の働

きを見、二つの都市を跨いで出没する幽霊の正体を見定めていきたい。

英国バラッドの幽霊たちと『フランケンシュタイン』の怪物

小川 公代

メアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』(Frankenstein, 1818)の怪物創造と科学・医学言説との関連性は幅広く考察されてきた。しかし、ディオダティ荘での怪奇談義に端を発したこの物語の執筆は、「怪物物語」ではなく「幽霊物語」を念頭においていたことを忘れてはならない。厳密にいうと、怪奇譚を意図した5人のうちこの目的を達成したのはポリドーリだけといえよう(『アーネストゥス・バーチトールド』が1819年に出版された)。

しかし、メアリの試みがバラッドの再話として再解釈されるならば、幽霊物語と呼べなくはない。ロマン派詩人たちの想像力を喚起し、おそらくメアリを魅了したであろうトーマス・パーシーのバラッド集『英国古謡拾遺集』(The Reliques of Ancient English Poetry, 1775)には、死の恐怖、悪夢、幽霊がモチーフとなっているものが多数あり(“Jemmy Dawson”や“Sweet William’s Ghost”など)、怪物創造やヴィクターの悪夢を彷彿させる。メアリの想像力を刺激したのは、スコットランドやスイスの田園風景だけでなく、生まれ育ったロンドンで吸収した膨大な知識であったことは想像するに難くない。本発表では、医師ポリドーリの幽霊がより近代的な感覚で描かれていることを踏まえつつ、メアリの作品もバラッド詩のゴシック的イメージと解剖学的な視点が溶け合わさった「幽霊物語」である可能性を探る。

オスカー・ワイルドと超自然——都市の悪魔と田舎の幽霊

桐山 恵子

人間が永遠の若さを得るために魂を売買する相手は古今東西、悪魔である。自分自身に代わり年をとる超自然的肖像画を手に入れることにより永遠の美を保つドリアンは、すなわち自らの魂を悪魔に売ったと考えられる。ところが『ドリアン・グレイの肖像』に悪魔は一度も姿を現さない。大都市ロンドンにもはや悪魔は不要なのか。ワイルドが描くロンドンは栄華に満ちた華やかな都市とは限らず、ワイルド作品には超自然的存在の出現を暗示するような非現実的な描写も多い。悪魔、妖精、怪物などが描かれた他の世紀末小説との比較もまじえて、摩訶不思議な大都市における不在の悪魔の意味を考察する。

怪奇現象のみが進行し、それを遂行したはずの超自然的存在は描かれない『ドリアン・グレイの肖像』に対して、幽霊が自身の存在証明に躍起になるのが「カンタヴィルの幽霊」である。田舎の屋敷に長年住む幽霊は、新しく越してきたアメリカ公使一家を怖がらせようと策を練るがごとく失敗する。正真正銘の超自然的存在であるカンタヴィルの幽霊は、なぜ幽霊失格の烙印をおされてしまうのか。背景である都市と田舎との違いも考慮しつつ、19世紀末イギリスの人々に恐怖を与える超自然とはどのようなものだったのかを追及したい。

イエイツの降霊術的詩法

木原 謙一

W.B. イェイツの初期の作品に“Down by the Sally Garden”というバラッドがある。これは現在民謡と化しており、イエイツの手によるものであることを知る人はむしろ少ない。イエイツ自身の註によると、スライゴーの老婆がうろ覚えの3行を唄うのを聞いて、そこから古い民謡を再現し

たという。一方、後の研究により、この唄は老婆のうろ覚えの3行からではなく、テキストとして残っている古い民謡を巧みにアレンジしたものであることが明らかになっている。自分の作品が、作者不明の民謡としてアイルランドの人々によって唄われるのを、イエイツは喜んでいた。ワーズワスが湖水地方に住み、土地のもつ神秘的な気配から靈感を受けようとしたのとは対照的に、イエイツはむしろ都市に住み、ありふれた田舎の土地に靈感を付与しようとする。尾島庄太郎がイエイツに会い、ジル湖の Innisfree 島を一度見てみたいと言うと、イエイツはジル湖には実は2つ Innisfree があるのを知らなかったとユーモラスに言い、「実際にそれが存在しなくても大した問題ではない」と語ったという。イエイツは、これらの詩によって、アイルランドの風景に土着性あるいは靈性を人為的に付与することに成功したわけであるが、この方法は一部の詩にのみかかわるものではなくイエイツの全作品における基本的なパターンである。さらに言えば、この方法は近代英文学そのものの成り立ちとも関わっている。近代英文学、特にモダニズム運動が過去と現在を結びつけることによる文化再創造の試みであったとすれば、コスモポリタン化していく世界において根無し草になりつつある現代にあって、イエイツの土地の靈を喚起する降靈術的詩法とも呼べる手法は、そのさきがけとしての意味をもつだろう。

第2部門「アメリカ文学」(720 教室)

アメリカ文学とお金

司会・講師	九州大学准教授	下 條 恵 子
講師	甲南大学教授	秋 元 孝 文
講師	熊本県立大学准教授	坂 井 隆
講師	黒田藩プレス代表	Edward Lipsett

アメリカ文学に登場する「お金」事例は、枚挙にいとまがない。Melville は *Moby-Dick* (1851) の中で、帆柱に打ち付けられたスペイン金貨について Ahab たちにその意味を解釈させ、Thoreau の *Walden* (1854) は“Economy”という章から始まる。アメリカン・ルネッサンス期に限らず、時代やジャンルの異なる作品を取り上げてみても、「お金」はアメリカ文学に頻出のモチーフであり、それを通じて多くの作品が「時間意識」「性」「共同体」「生と死」といった文学的テーマを描いてきたのである。ただし、アメリカ文学の中の「お金」を、時代やジャンルを超えて論じ合う機会は今まで限られてきたように思われる。本シンポジウムは、様々な時代の作品に登場する「お金」の多様なモチーフに注目し、さらには実際に「文学とお金」を扱う出版業の視点を取り入れながら、今まで論じられてきた文学的テーマを再考することを目的とする。このような領域横断的な試みから、アメリカ文学の新たな特徴が見出せれば幸いである。

The Great Gatsby と貨幣

秋 元 孝 文

「お金でいっぱい」 Daisy の声に代表されるように *The Great Gatsby* (1925) は貨幣のイメージで満ちている。20年代は消費社会が開花した時代だと言われるが、消費とはすなわち貨幣をひたすら商品と交換する行為であり、Gatsby がかつてその自己鍛錬を見習い、のちに Max Weber が資本主義の精神をそこに読み取った Benjamin Franklin が唱導した、自己目的的なまでにひたすら貨幣の獲得を目指す動きは、ここに来て反対の動きに転じている。貨幣はかき集めて手放さない

ものから、どんどん手放すべきものになったのだ。貨幣は時間によって育ち、資本となる。“Time is Money”と言って時間の換金性を見抜いたのが Franklin だとするならば、その末裔である Gatsby は今度は逆に「過去は取り戻せる」と貨幣をもって過ぎ去った時間と交換することを夢想する。時間をその中心的テーマに据えたこの小説で、どうも時間と貨幣は分かちがたく結びついているように思える。こうして貨幣と時間の関係を通して見た時に *Gatsby* はどのように読めるのか、考えてみたい。

“Shemale porn saved my soul”

—— Nina Arsenault, *The Silicone Diaries* における賃金労働と性的身体

坂井 隆

カナダ出身のパフォーマンス・アーティスト Nina Arsenault (1974-) は、理想化された女性美の獲得を目指して全身に整形手術を施し続けるトランス・ジェンダーの芸術家である。変化し続ける身体を、様々な芸術手段——ソロ・パフォーマンス、写真、インスタレーションなど——を利用して公表し、観る者に性や身体、自己アイデンティティを巡る問題について再考させる。自身の身体を芸術作品と見なす Arsenault は、2008 年に自伝的ソロ・パフォーマンス作品 *The Silicone Diaries* を発表する。その中で特に興味をひくのは、整形手術費用を稼ぐために「シメール」(“shemale”) ポルノ産業に身をおいて「セックス・ワーカー」として働いた経験を語るくだりである。性的商品として身体を顧客に提供して賃金を得、そのお金を使って自身の身体をマネキン人形やポルノ女優のような身体へと改造することによってその商品の価値をさらに高めていくのである。本発表の目的は、*The Silicone Diaries* における、この〈クィア〉な経済学を分析することによって、その作品、さらには Nina Arsenault 自身における賃金労働と性的身体との関係を明らかにすることである。その際、彼(女)の先輩格に位置する芸術家たち、例えば、外科手術を通しての身体改造(“Carnal Art”)を実践するボディー・アーティスト Orlan や、セックス・ワーカーからフェミニスト・パフォーマンス・アーティストに転身した Annie Sprinkle などとも比較しながら、考察したい。

死を、あるいはお金を与える—— Auster 作品における死者と作家の経済学

下條 恵子

Paul Auster (1947-) の物語には、しばしば死者とお金がつきまとう。例えば初期の代表作 *The Locked Room* (1986) において、語り手は失踪した友人の草稿を管理・出版することによって原稿料を稼ぎ、*The Book of Illusions* (2002) の主人公は、飛行機事故で家族を失い絶望するが、保険金を得て大学を退職し、本の執筆に夢中になる。彼らに共通するのは、死という出来事を通じて金銭を受給していることと、その「借り」を相殺するかのように死者たちについて語るということである。つまり、彼らには死が与えられるのと同時にお金が与えられ、この「死/金銭の贈与」が彼らの存在を作家(あるいは語り手)たらしめているということになる。また、*In the Country of Last Things* (1987) に登場する通貨“glot”(ギリシャ語で「言葉」の意)が示すように、Auster の物語世界では、返礼不可能なはずの Derrida 的な「死の贈与」が「金銭の贈与」として登場し、「物語」による返済が可能な「経済」へと転換されている。本発表の目的は、Auster 作品において、死がもたらす「お金」が死者と作家の関係にどのような作用をもたらしているのかを明らかにすることである。今回は特に、「死や喪失に対して支払われるお金」つまり「保険」の制度や思想に注目しながら、「生命保険の元セールスマン」Nathan Glass を主人公に据えた *The Brooklyn Follies*

(2005)を中心に、死者と作家の経済関係を考察してみたい。

翻訳・出版業からみる「文学とお金」

Edward Lipsett

今回の発表では、翻訳業や出版業を営んできた自らの経験をもとに、翻訳・印刷製本・出版といった、文学作品の流通プロセスについてお話しできればと考えている。まず、私の経歴を簡単に紹介させていただきたい。メリーランド大学で電子工学と日本文学および日本の文明を学び、1980年から1年間慶応義塾大学に留学した。ここで知り合った巽孝之氏（現・慶応義塾大学教授）らと共にSF小説の翻訳研究を開始。大学卒業後は貿易業務に従事した後、1984年に福岡で商業翻訳会社インターカムを設立し、2003年には優れた文学作品を翻訳、出版することを目的とした黒田藩プレスを設立した。翻訳家としては、SF作家眉村卓（1934-）の『司政官』シリーズ（1970-80年代の短編集）をはじめ、様々な日本語小説の英語翻訳を行ってきた。今回の発表では、Jules Verneの『月世界旅行』の翻案小説（c.1883）などで知られる黒岩涙香（1862-1920）らの時代から機械翻訳なるものが登場した現代までの翻訳の変遷をたどり、その上で、科学技術の発展と相まって生じてきた著作権問題（翻訳、電子書籍、二次利用などの権利とその契約）について考察してみたい。また、黒田藩プレスの出版を例に、オフセット印刷とPOD（Print On Demand）の違いとコスト比較、印税計算方法、流通に関する説明など、実際の「文学とお金」の知識も紹介できれば、と考えている。

第3部門「英語学」（726教室）

談話と統語構造とのインターフェイスを求めて

——例外的文法現象とフェイズ理論——

司会・講師	九州大学教授	西岡 宣明
講師	宮城学院女子大学准教授	増 富 和 浩
講師	産業医科大学助教	田 中 公 介
講師	九州大学専門研究員	團 迫 雅 彦

生成文法理論に基づく談話概念を反映させた近年の研究は、Rizzi（1997）に始まるCP構造のカートグラフィック的研究に代表されるように、topic, focus等の概念を組み込んだ文/節構造研究である。また、CP構造は生成文法研究において、近年特にフェイズ理論（Chomsky（2000, 2001, 2005, 2007, 2008））の中で理論的側面からもその重要性が増しており、その構造研究は文法理論構築の観点からも意義深い。本シンポジウムは、以下の2点を目的とし、文の談話とのインターフェイス構造を談話連結wh句の統語的振る舞い、繰り返し発話と文法規則、右方移動とその派生、談話と関連する機能範疇の獲得と文法現象といった多方面から探りたい。

(i) 談話と結びつくことにより、一見、統語規則の例外と思われる具体的現象の分析を通して、その統語的メカニズムを解明する。(ii) インターフェイス構造のフェイズとしての役割を検証し、最適の文法理論構築に貢献する。

談話 (D) 連結 wh 句の統語特性とその内部構造の関係について

増 富 和 浩

Pesetsky (1987, 2000) などにおいて指摘されているように、which boy などの談話 (D) 連結 wh 句は、who などの非 D 連結 wh 句とは対照的に、移動に課せられる制約 (e.g. 優位性条件) を受けないなど、疑問文の派生過程において例外的な振る舞いを示すことが知られている。このような例外性に対する説明として、無差別束縛 (unselective binding) などに基づくいくつかの提案がなされてきたが、本質的な問題の解決には至っていないと考えられる。一方、D 連結 wh 句の例外的特性は、定名詞句からの抜き取りが可能となるなど、名詞句の派生過程においても生じることが指摘されている (cf. Fiengo and Higginbotham (1981) など)。本発表では、D 連結 wh 句に関わる例外的な現象と、それらに対する従来のアプローチを概観した上で、まず、問題となる例外的特性が、D 連結 wh 句が持つ意味特性、すなわち「(特) 定性」に起因している可能性を指摘する。次に、統語構造において「(特) 定性」が生じる仕組みと D 連結 wh 句が示す例外的特性との関係を、単なる素性の設定ではなく、D 連結 wh 句の内部構造の点から説明できるかについて考察する。

発話の繰り返しと文法現象

西 岡 宣 明

(1) にみられるように、英語の疑問文は構造上上位の wh 句を超えての移動を禁止する優位性効果がある。しかし、(2B) は、(1) と同じ統語配列であるが文法的な文である。

(1) *What did who drink at Mary's Party?

(2) A: What did Dracula drink at Mary's Party?

B: What did who drink at Mary's Party?

また、否定文においても、(3) が示すように通例、統語的島の中にある要素を否定の対象とすることはできないのだが、(4) のような文ではそれが可能である。

(3) #I didn't talk to Chomsky and all of his colleagues.

(# は all の部分否定の解釈 (NEG>all) がないことを表す。)

(4) I didn't talk to Chomsky and all of his colleagues; I talked to Chomsky and most of his colleagues.

本発表では、(2) (3) とともに先行発話を繰り返す特徴を有していることを明らかにし、その談話構造を反映した CP 構造分析と統語メカニズムを提案することにより、談話と文法とのインターフェイス構造を考察する。

英語の焦点化移動構文のフェイズ理論分析——右方移動現象を中心に

田 中 公 介

英語の焦点化構文では、(1) の wh 移動のような左方移動が一般的であるが、(2) や (3) のように焦点化要素が右方移動するものもある。

(1) Who does John Love _? (Wh 疑問文)

(2) John bought _ for his mother a painting that he liked. (重名詞句転移構文)

(3) [A review _] came out yesterday of Chomsky's. (名詞句からの外置構文)

(2) や (3) の右方移動は、左方移動とは異なる節境界制限のような特性を持つことから、例外的な操作として分析される可能性がある。だが、(1) - (3) の焦点化構文には共通した統語特性

を示すという事実もあり、右方移動を一様に統語的な移動規則の例外として分析することにも問題がある。

そこで本発表では、Chomsky (2008) のフェイズ理論を用い、談話とのインターフェイス構造を射程に入れた統語メカニズムの下で (1) - (3) の焦点化構文の派生を考察し、一見例外的な右方移動構文の特性が現行の文法理論の枠組みで適切に説明されることを示す。この分析の帰結として、談話インターフェイス構造を反映したフェイズ理論分析の妥当性を考察する。

言語獲得過程における空主語現象と統語構造

團迫 雅彦

言語獲得過程において観察される子ども特有の振る舞いの一つとして、(1) のような空主語現象が挙げられる。英語のような非空主語言語とされる言語であっても、獲得過程では主語が欠ける発話が観察される。

(1) Want more. (Hyams (1986))

Hyams (1986) 以来、こうした空主語の生起とそれに関与する様々な談話的特性や統語的特性が明らかにされてきた。例えば、(i) 目的語の脱落は主語に比べると非常に少ないこと (Hyams and Wexler (1993))、(ii) 文頭に他の要素 (wh 句や副詞句など) がある環境では空主語が生起しないこと (Rizzi (1992))、(iii) 主節の動詞が不定詞で現れるときの方が空主語が生起しやすいこと (Roeper and Rohrbacher (1994)) などが挙げられる。こうした空主語現象とそれに関わる諸特徴に対して、統語構造、特に言語獲得過程における機能範疇に焦点を当てた提案がなされてきた (Rizzi (2000) など)。しかし、どのようにして大人の文法に発達していくのかが十分に明らかにされていないなど未解決の問題点が残されている。本発表では、談話を反映した統語構造という観点から、言語獲得過程において空主語を生み出すメカニズムに統語構造がどのように関与しているのかについて考察する。

〈第2日〉10月27日(日)

研究発表

第1室(712教室)

司会 北九州市立大学教授 木下善貞

Lilith における「生命の輪」の起点の苦悩

九州大学大学院修士課程 隈部 歩

George MacDonald の最晩年の作 *Lilith* (1895) には Adam と Eve、そしてユダヤ伝説において Adam の最初の妻とされる Lilith が登場する。本作品を論じる場合、Lilith は大抵負の側面が強調されることが多く、既存の秩序の転覆者、あるいは当時流行していた女性像：ファム・ファタルと関連付けて捉えられたりもする。

本発表では Lilith の負の側面ばかりに着目するのではなく今まで見過ごされて来た「何故彼女はそのようになってしまったのか(ならざるを得なかったのか)」ということに光を当てる。その際に重要視するのは母から子への生命伝達でありそれを本発表では「生命の輪」と呼ぶことにする。神話において女性が独力で生命を産み出し男性の力に対抗しようとするエピソードが見受

けられるが、Lilithが娘Lonaを産んだのも女性にのみ与えられた生命を産み出す力を誇示して夫Adamを服従させようとしたためである。あくまで自己として不死で在り続けたいと願ひ娘を自分の不死性(生命力)の流れ出す“an open channel”として憎悪する彼女の姿に「生命の輪」の起点が抱く苦悩、そして起点となることの失敗が表れている。脈々と流れ続け受け継がれて行く生命の川というものを理解出来ずそれ故に苦しむLilithが回復すべきもの・必要とすることは断絶していた「生命の輪」を結び、その起点になることにあるという解釈を提示したい。

2. *The Hobbit* 帰還の物語——ドワーフの帰郷による伝説世界の回復

九州大学大学院修士課程 渡邊裕子

J.R.R. Tolkienの*The Hobbit* (1937)は副題「行きて帰りし物語」が示す通り、主人公ビルボが冒険に出、帰るまでの物語である。しかし作品において帰還を果たすのはビルボだけではない。物語のそもそもの軸はドワーフたちの帰郷から成立しているのだ。

本発表では、従来論じられてきた、ビルボ=現代的読者の代表(読者と伝説世界の仲介役)、ドワーフ=古典物語的精神の具現と捉える図式を踏襲した上で、その図式が物語の本筋とどのように関係づけられるかを考察する。ドワーフの長トリンは皮肉的に描かれることが多い。しかし彼が終局でみせる英雄的な死はそれまでの彼と読者の壁を破壊し、共感を構築するものである。これによりドワーフが国の再建を果たし、帰還、繁栄をすることになることは読者が彼等の精神を受け入れることと連動している。

このように本発表はドワーフの帰還が現代における古典物語世界の回復という意味を持つことを明らかにする。

司会 福岡大学教授 山内正一

3. マリアン・アールと流れる創造性

——パレット・ブラウニング『オーロラ・リー』における詩作と時代性

九州大学大学院博士後期課程 浜本裕美

『オーロラ・リー』におけるマリアンの重要性は広く認識されている。だが、先行研究の主な関心は第六巻以降に向かい、第三巻、四巻でのオーロラのマリアンとの最初の出会いは、十分に論じられているとは言い難い。本発表では、労働者階級出身のマリアンとの出会いが、第五巻でオーロラが同時代を描く叙事詩を信奉し、一冊の本を完成させることに大きく寄与することを明らかにする。

第一に、本作品では詩的創造性が流体のイメージで語られ、第五巻でオーロラの創造力がよどみなく流れていることを指摘する。第二に、マリアンの人生を巡るテキストに二つの流動性を見いだす。まず、マリアンの話を書く過程は、オーロラに他者の視点から詩を執筆する機会を与える。さらに、マリアンの人生は、地理的移動・階級間移動という近代的流動性に特徴づけられる。自己から他者へ向かう詩人の流動性と、近代社会を特徴づける流動性が、オーロラの流れる創造性の源になっていると論じたい。

司会 九州大学教授 太田 一 昭

4. 「愛」の変奏——ジョン・リリー：『ガラシア』から『愛の変身』へ

鳴門教育大学准教授 杉浦 裕子

本発表ではイタリア・ルネッサンス期の絵画に見られる図像を手がかりに、ジョン・リリー (John Lyly) の『ガラシア』 (*Gallathea*) と『愛の変身』 (*Love's Metamorphosis*) における「愛」の主題の変奏を分析する。

『ガラシア』ではキューピッドに対するダイアナの勝利を描いてエリザベス女王賛美を行う一方で、キューピッドの描かれ方や、キューピッドが関わらない主筋において、「聖愛」と「俗愛」や「貞節」と「快楽」といった「ルネッサンス的対立」とその調和が見られる。『愛の変身』でも、最初から「愛と貞節の調和」を主張し理性的な「愛の神」としてのキューピッドが登場するが、キューピッドが関わるニンフたちと若者たちの筋は理想的な愛の成就に至らない。むしろこの劇では副筋も含めて途中から「愛の平等」に主題がシフトする。「愛」の主題の変奏とキューピッドの役割を踏まえ、また、三美神の図像が表す「愛の循環」や「恩恵の三行為」を手掛かりに、後者の劇の不安定な結末に新たなアレゴリー解釈を試みる。

5. ブルジョワ家庭悲劇の誕生

——英国歴史劇と She-tragedy の系譜からみた *The Tragedy of Jane Shore*

鹿児島大学教授 大和 高行

(招待発表)

Nicholas Rowe の *The Tragedy of Jane Shore* (1714年初演) は、18世紀初頭に人気を博した劇として知られるが、英国歴史劇と She-tragedy の系譜に連なるものとして捉えることができる。本発表では、まず、Rowe が1709年から1710年にかけてシェイクスピア全集を出版した後に Shore の悲劇を主題とする劇を創作している点に着目して、Rowe によるシェイクスピア史劇の受容のありようを明らかにする。次に、Rowe が史実に縛られない自由な筋立てを採用しながら、Shore の悲劇を崇高なものとして描いている点に着目する。Rowe は、Sir Thomas More などの史書を材源としつつも、数々の史実を曲げながら、市民階級の女性 Shore の苦悩に焦点が当たる悲劇を作り出した。残酷、移り気、嫉妬、良心、友愛を体現する登場人物の感情がほとぼしる中で、Shore の苦しみが際立ち、彼女に対する観客の憐みが効果的にかき立てられる。英国歴史劇に She-tragedy を接合し、18世紀初頭の観客にとって身近なものと映るブルジョワ家庭悲劇の相を前景化させた Rowe の作劇上の仕掛けと観客の感動との関係を確認したい。

第 2 室 (713 室)

司会 九州大学教授 鷗 飼 信 光

1. *Brideshead Revisited* と *The End of the Affair* との比較研究

——Sebastian、Julia、Sarah の “holiness” をめぐって——

福岡大学大学院博士後期課程 福 田 成 美

Evelyn Waugh の *Brideshead Revisited* (1945) と Graham Greene の *The End of the Affair* (1951) は、それぞれ第一次、第二次世界大戦時のイギリスを舞台に、イングランドにおけるカトリシズムの問題を扱った代表作と言われている。二作品はどちらも愛と信仰を物語の中心的テーマとしており、多くの類似点を有している。本発表では作品中の主要人物である *Brideshead Revisited* の Sebastian と Julia および *The End of the Affair* の Sarah が織りなす〈回心のドラマ〉を、愛ゆえの苦しみ (“suffering”) がもたらす恩寵という観点から考察する。その際には、それぞれが体現する内在的 “holiness” に着目して、世俗的・肉体的「愛」が高次の「愛」(宗教的・精神的「愛」)へと高まっていく経緯を明らかにする。

2. クルツにみる異化のメカニズムとしての「怪物」

——*Heart of Darkness* におけるカーニヴァルの力学とニーチェ的思想——

北九州市立大学大学院博士後期課程 今 川 京 子

西洋的イデオロギーの底流には創造神話がある。この創造神話をモチーフにする際に登場するのが「怪物」の概念である。19世紀から20世紀にかけては、近代ヨーロッパ文明(殊にイギリス)が自己拡張的に、また自己発展的に変貌を遂げた時期である。他方、このヨーロッパ的規範の背面を突き、その閉鎖的かつ排他的虚構性を暴露し、混沌と暗黒から成る真理の探究手段として「怪物」をモチーフにしたのが Conrad である。

本発表では *Heart of Darkness* (1899) の Kurtz を「怪物」の表象として考察する。Conrad は近代を直視して時代の心理を解明し、不可視のコードやイデオロギーが人間をいかに支配しているかを「怪物」を介して逆説的に捉え、個人の権力意志を通じて人間存在を問う。本発表ではニーチェ思想に依拠しつつ、怪物としてのクルツが自己超克という創造行為に踏み出す超人的存在であることを示し、「怪物」が人間の自己超克・超越の象徴として逆説的に既存のイデオロギーに挑戦し続ける存在であることを論証する。

司会 宮崎大学准教授 新 名 桂 子

3. 母性による支配の城——*To the Lighthouse* における母親の支配と誘引

九州大学大学院博士後期課程 浅 田 えり佳

Virginia Woolf の *To the Lighthouse* (1927) において描かれる Ramsay 家について、主に母親である Ramsay 夫人を中心に、Woolf の描く「母性」は普遍的な慈愛や柔和だけではなく一種の苛烈さや支配欲を示すものであるという点を考察したい。

夫の客人をもてなすことに熱心な夫人は、人々に一体感をもたらし、別荘内での諸事を取り仕切る実質的な支配者である。しかし特に知的活動において男性を格上だと考えており、支配力を

持ちながらも家庭の天使的な女性である夫人には、若い女性客に結婚を勧め、娘達にも良妻賢母になるよう教育を施すという、同胞を増やそうとする行動が見られる。

夫人の城である別荘は、常に浸食に晒され、夫人の死を契機に荒れ果てる。これは夫人の支配力の弱化を表すと同時に、夫人のような旧弊的な女性像及び家庭像の衰退をも示すと考えられる。

以上の様に、*To the Lighthouse* における母性は、家という城を支配し、子どもたちを束縛し、同胞を貪欲に欲する存在であるということを検証していきたい。

4. *To the Lighthouse* における他者理解の可能性

九州大学大学院博士後期課程 原 田 洋 海

Virginia Woolf が *To the Lighthouse* を執筆するに際し、自らの両親をモデルに Ramsay 夫妻を描いたことはよく言及されている。その作品内において、画家である Lily Briscoe は Ramsay 夫人の本質をとらえるべく、夫人の死後、夫人について想像を巡らせたり、夫人に関する自らの記憶を辿ったりする。これはまさに Woolf 自身が自らの両親に対して行った行為の相似形であり、Lily が夫人の本質を絵に描こうとしたように、Woolf 自身もまた執筆することによって若い時に亡くした両親の実体を作品の中に見出そうとしたのである。

しかし、その二つの相似形において異なるのは、Woolf 自身が言葉によって両親の本質を紡ぎだそうとしているのに対して、Lily は言葉では何も言い表せず、他者理解は個人的な連想によって達成され、他者の本質は輪郭の不明瞭な印象として捉えられると考えている点である。

本発表では、他者を理解するために言葉ではなくより抽象的な感覚を必要としている Lily の姿を言葉によって描くという、Woolf の一見矛盾した行為にも着目しながら、*To the Lighthouse* における他者理解について考察していきたい。

司会 福岡女学院大学大学院教授 吉 田 徹 夫

5. 『夜中に犬に起こった奇妙な事件』の反探偵小説性とポストモダニズムからの踏み出し方

山口大学教授 宮 原 一 成

(招待発表)

ポストモダニズム文学の次には何が来るのか。統一見解と呼べるような解答はまだないが、それでも文学創作の場においては、すでにさまざまな実践がなされているようだ。本発表は、そうした実践例をひとつ、2003年に英国で出版された Mark Haddon の話題作 *The Curious Incident of the Dog in the Night-Time* のなかに見出してみようという、ささやかな試みである。

この小説は、自閉症スペクトラム障害を持つと思しき少年 Christopher が、近所の犬の殺害事件を捜査する、という探偵小説の枠組みで始まるが、その枠組みはやがて自壊し溶解していく。しかしだからといって、Stefano Tani がポストモダン文学のひとつの究極形だとした〈反探偵小説〉あるいは〈形而上学的探偵小説〉に留まるわけではない。むしろ、きわめて非ポストモダンの人情や情愛を指向するベクトルが感じられる。この方向性の観察を通して、ポストモダニズムの次に来るものの有り様について考えてみたい。

第 3 室 (724 室)

司会 九州大学教授 高 橋 勤

2. *My Mortal Enemy* における対立要素

九州産業大学准教授 志 水 智 子

Willa Cather の *My Mortal Enemy* (1926) においては、Myra Henshawe の人生模様を通して、貧富、未婚と結婚、ヨーロッパ文化とアメリカ文化、カトリックとプロテスタント、愛と憎しみ、おとぎ話と現実、血縁の絆と他人との絆、若さと老い、といったさまざまな対立要素が描かれる。本発表ではこの作品で描かれるさまざまな対立要素が生み出す Myra のむなしい欲望と孤独の意味について考察していきたい。

財産と情熱的な結婚という対立要素は、ないものねだりをして常に不安定な気持ちになる Myra の性格を浮き彫りにする。Myra が住む土地を移動する様子は、彼女が属する階級の移動を意味する。また彼女はカトリック信奉にこだわるようになるが、これは裕福な大叔父の価値観と華やかな生活への回帰願望を意味すると考えられる。

自分に尽くしてくれる Oswald を最終的に“my mortal enemy”と呼ぶ場面では、対立要素に惑わされることに疲れ、自分の殻に閉じこもる Myra の孤独感が描き出されているのである。

司会 鹿児島女子短期大学教授 高 島 まり子

3. *The Blithedale Romance*——Zenobia への愛の告白

熊本学園大学大学院博士後期課程 中 嶋 寿 子

Miles Coverdale は、“The reader must not take my own word for it” (III, 247) という本人の言葉からも分かるように、信用のできない語り手であると思われる。より良い生活を求めて Blithedale へやってきたものの、自分とは正反対の逞しく博愛精神に満ち溢れた Hollingsworth と出会い、自尊心を挫かれ、卑屈とも思えるような精神状態に陥り、挫折感と現実逃避を繰り返すことになる。

本論では、語りの信憑性に大きく影響する Coverdale の心の奥深くに潜在している劣等感と、そのために明らかにできない Zenobia への愛が、物語全体を通して暗示されていることを述べたいと思う。Coverdale は、詩人として人並み以上にプライドを持っていたと思われるが、精神的な弱さや Hollingsworth への嫉妬心やライバル意識などから、自分が思い描く理想の生活を送ることができず、焦りから平常心を保つのも難しくなっていく。そのような脆弱な語りの中で、いかにして Zenobia に対する思いを表現し、カタルシスを得るに至ったのかについて論じてゆきたい。

司会 西南学院大学名誉教授 安河内 英 光

4. 密室に注がれた視線——19世紀アメリカの都市とポーの推理小説

九州大学大学院准教授 高 野 泰 志

(招待発表)

すでに多くの研究者が指摘するように、小説メディアの普及を促したのは都市の発展であった。文学の需要のされ方が劇場や公共の場所での朗読・上演という形態から個室の中での孤独な消費へと大きく変化したことが、小説の普及に大きく関わっていたのである。いわば近代都市が人々を個室に追いやり、孤独な消費を促したことが小説の成立に大きく寄与していた。したがって19世紀小説はたとえ都市を舞台としなくても、自らのメディア成立の土台として、都市の発展という現実に向き合わざるを得なかったと言える。また都市を主題とする小説は、必然的に小説というメディアそのもののあり方を描き出すメタフィクショナルな構造を持つことになるはずである。本発表はエドガー・アラン・ポーの都市を舞台とした、今日推理小説と呼ばれるジャンルの作品を、都市小説としての観点から読み直す。謎の解明や探偵という役割など、後の世代が「推理小説」の主要な要素として受け継いだ側面は、あくまでポーが都市を描くに際して派生的に生まれてきた副産物であり、ポーの狙いは小説メディアそのものに対するメタフィクショナルな関心であったのである。

第 4 室 (725 室)

司会 福岡工業大学教授 古 川 武 史

経験者使役構文について

九州大学大学院博士後期課程 萱 嶋 崇

日英語における心理動詞は以下のような対比を成す。

- (1) a. I fear thunder.
 b. Thunder frightened me.
 c. *Taro made me fear thunder.
- (2) a. 私は雷を恐れている。
 b. 雷が私を恐れさせた。
 c. *太郎が私に雷を恐れさせた。

本発表では、(1a, b) と (2a, b) の対比に見られる日英語間の使役交替に関する相違点について、また (1c) と (2c) で日英語に共通して見られる、心理動詞の使役構文における出現に対する制約について説明を試みる。また心理動詞に関わる更なる問題として、日本語における心理動詞は目的語の格表示に関して特殊な1類を成す。

- (3) a. 私はボールを / に投げた。
 b. 私は太郎 * を / に会った。

c. 私は結果を / に喜んだ。

そこで、本発表では経験者使役構文に関する提案を発展させ、(3)に見られる目的語の格の多様性が如何にして生じるのか、項構造の観点から説明を試みる。

司会 九州大学准教授 鈴木 右文

2. 節構造と文法性——動名詞から見えるもの

九州大学大学院博士後期課程 下仮屋 翔

動名詞構文が顕在的な主語を備える場合、対格または属格の形態をとるとされる。それらの両例は様々な統語環境において交替可能であり、またその際の意味解釈にも違いはないと考えられているが、中には、両者が異なる振舞いを示している事実も見受けられる。例えば、それらは共に格位置にのみ生じ、It 外置構文では認められないという特徴を共有しているが、照応形の束縛などの現象において対照的な文法性が指摘されている。

また、両動名詞構文の表層的な語(句)の並びは、巨視的に見ると主語--動詞--(目的語)などとなり、一般的な定形節と同様のものであると言えるが、三者の振舞いは、いずれも完全には一致していない。

そこで本発表では、これらの統語的特徴の違いについて、Phase 理論に立脚した独自の提案に基づくことで原理的な説明を試みたい。具体的には、定形節については規範的な想定に従い、Phase である CP 構造をなすとする一方で、対格動名詞は Phase でない CP 構造をなし、属格動名詞は Phase である DP-*v*P 構造をなすと提案していく。

3. Transfer とスコープ解釈に関する考察——弱フェイズの観点から

九州大学大学院博士後期課程 大塚 知昇

日本語の格付与に関して、以下のような事実が指摘されている。

- (1) a. 太郎が右目だけをつむれる。(*only>can, can>only)
 b. 太郎が右目だけがつむれる。(only>can, ?can>only)

(1a) では、目的語が対格「-を」で、(1b) では主格「-が」で表示されている。ここで、(1b) のように主格で示された目的語に付く「-だけ」は、「-れる」より広いスコープを取ることができる。

この現象に対し、Takahashi (2011) が示したように、直接格に関わらない要素のスコープ解釈も、格の可能性により左右される。

- (2) a. 太郎が魚を胡椒だけで食べられる。(*only>can, can>only)
 b. 太郎が魚が胡椒だけで食べられる。(only>can, ?can>only) Takahashi (2011: 761)

従って、格付与は間接的な形でスコープ解釈に影響を与えていると予測される。

これに対し、Takahashi (2011) は、格付与とフェイズの観点から説明を試みている。しかし、本発表では、Takahashi (2011) の観察は基本的に正しいと考えるが、その説明に問題があることを示し、弱フェイズと Transfer の観点から、この観察の説明がうまく引き出されることを示す。

参考文献

Chomsky, Noam (2008) "On Phases," *Foundational Issues in Linguistic Theory*, ed. by Robert Freidin, Carlos P.

Otero and Maria L. Zubizarreta, 133-166, MIT Press, Cambridge, MA.
 Takahashi, Masahiko (2011) "Case-Valuation, Phasehood, and Nominative/ Accusative Conversion in Japanese,"
Proceedings of the 39th Conference of NELS, 759-770.

第 5 室 (726室)

司会 熊本大学教授 登田 龍彦

3. 英語の主題右方転移構文における任意性について

福岡大学大学院博士後期課程 濱保 義宏

英語の主語右方転移構文では、do または be 動詞の有無とその位置により次のような三種類の分類が可能である (Durham 2011)。

- (1) Standard Right Dislocation (SRD)
 He's a strange bloke *that man*.
- (2) Extended Right Dislocation (ERD)
 He stayed with this other woman *John did*.
- (3) Reverse Right dislocation (RRD) : イギリス北部方言
 - a. She got a great bargain *did her Mum*.
 - b. He'll do anything for anybody *will Rich*.

右方転移構文は多くの言語において見られ、これまで、それぞれに右端への付加とする分析 (De Cat 2002) や左方移動によるものであるとする分析 (Samek-Lodovici 2005, 2006) が提唱されているが、本発表では、(4) に挙げる Parallel and Ellipsis 分析 (Ott & deVries 2012, under revision) を取り入れる。

- (4) [CP₁ He is a strange bloke] : [CP₂ [that man]_i [_{IP} _{ti} is a strange bloke]]

先行研究と比較することでこの分析がより適切であることを示し、そして最適性理論の枠組みにそれを取り込むことで、(1) - (3) で挙げた任意性に妥当な説明を与えることができると主張する。

4. 動詞句削除の vP 領域における VP 話題化移動分析

九州工業大学講師 前田 雅子
 福井大学講師 中村 太一

本発表では、Heavy NP Shift (HNPS) を受けた残余 VP と削除された VP の派生に vP 領域への VP-Topicalization が関与していると論じる。まず、HNPS は vP 領域への DP の焦点化移動と残余 VP の話題化移動により派生されると主張する。この主張により、HNPS 構文の残余 VP と話題化を

受けた VP が、NPI 認可の可能性等で平行的振る舞いを示す一方で、再帰代名詞の認可の可能性等で異なる振る舞いを示す事実が説明されると論じる。次に、CP 領域への話題化に基づく Johnson (2001) の VP 削除分析を批判的に検討し、VP 削除には *v*P 領域への話題化が関与していることを、NPI や再帰代名詞の認可の可能性等を用いて示す。最後に、削除と移動の統一的説明の可能性について議論する。

司会 長崎大学教授 廣 江 顕

5. サバイブ・ミニマリズムにおける島の効果について

宮崎公立大学教授 福 田 稔

(招待発表)

サバイブ・ミニマリズム (Survive-minimalism) を前提として、Stroik and Putnam (2013: 70-71) は、左枝制約 (Left Branching Condition) の効果を示す (1) に関して、主語 [my talking to who] を構築する派生と主節を導く派生は異なり、主語にある who は異なる派生に関与できないために、非文法的になると説明している (下線部は痕跡)。

(1) *Who did [my talking to who] bother Hilary?

Stroik and Putnam (2013) はこの分析を精密化していないが、本発表では、同様の分析が強い島 (strong island) の他の事例である複合名詞句や付加詞などにも適用できると提案する。また、弱い島 (weak island) の効果は、停止 (stall) すべき派生を強引に続けた結果であり、Chomsky (1986: 38) が指摘した wh 島違反の累積効果は、無理な操作の数に対応していると論じる。

参照文献

Chomsky (1986) *Barriers*, MIT Press.

Stroik and Putnam (2013) *The Structural Design of Language*, Cambridge University Press.

特別講演 (710 教室)

司会 九州大学教授 小谷 耕二

演題 アメリカ新聞漫画の黄金時代 1905-1944

講師 東京大学大学院教授 柴田 元幸 (しばた もとゆき)

講演内容

テレビはむろんのこと、映画・ラジオもまだ普及していなかった 1900-1910 年代のアメリカにおいて、フルページ、フルカラーで描かれた日曜版新聞漫画は、時代の中心的なエンターテインメントとして多くの読者に親しまれ、その水準も驚くほど高かった。講演では、なかでもとりわけすぐれた 5 人の作家——Winsor McCay, Frank King, George Herriman, Gustave Verbeek, and Lyonel Feininger——の作品を具体的に紹介し、今日ではとうてい再現しえないその芸術性を実感していただければと思う。

講師紹介

柴田 元幸

1954 年東京生まれ。1984 年東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専門課程博士課程単位取得満期退学、1985 年 Yale 大学大学院修士課程修了。東京大学大学院人文社会系研究科人文社会系研究科教授 (現代文芸論研究室)。アメリカ文学専攻。2006 年、初の小説集『バレンタイン』を新書館より発行。2007 年には現代文芸論研究室を沼野充義とともに創設、また自身の責任編集による文芸雑誌『モンキービジネス』を創刊し、2011 年の第 15 号まで刊行した。

著書『アメリカン・ナルシス——メルヴィルからミルハウザーまで』(東京大学出版会、2005 年)でサントリー学芸賞受賞。2010 年、訳書『メイスン&ディクソン』(トマス・ピンチョン、上・下)で第 47 回日本翻訳文化賞受賞。主な著書に『アメリカ文学のレッスン』、『翻訳教室』、『翻訳夜話』1、2。(村上春樹と共著、文春文庫)、『世界は村上春樹をどう読むか』(沼野充義、藤井省三、四方田犬彦と共著、文藝春秋 2006 のち文庫)。主な訳書にオースター『幽霊たち』、『孤独の発明』、『幻影の書』、ダイバック『シカゴ育ち』、ミルハウザー『三つの小さな王国』、エリクソン『黒い時計の旅』、ジョゼフ・コンラッド『ロード・ジム』、その他、100 冊近い著訳書 (共著、共訳書を含む)がある。

